

「透明人間」の誕生とその前後

——九十周年に寄せる覚書——

中 前 正 志

一 「透明人間」誕生九十周年

一八九七年、イギリスのH・G・ウェルズによるSF作品『*The Invisible Man*』が刊行された。その影響力は日本においても絶大で、戦中戦後の主な翻訳をざっと拾い挙げていっても、

- 昭和十六年 (一九四一) 『透明人間』 土屋光司訳、三邦出版社 ウェルズ科学小説叢書3
- 昭和三十一年 (一九五六) 『透明人間』 宇野利泰訳、東京創元社 (↓昭和三十九年創元推理文庫)
- 昭和四十二年 (一九六七) 『透明人間 他三篇』 石川年訳、角川書店 角川文庫
- 昭和五十二年 (一九七七) 『透明人間』 橋本楨矩訳、旺文社 旺文社文庫
- 昭和五十三年 (一九七八) 『透明人間』 宇野利泰訳、早川書房 ハヤカワ文庫
- 昭和五十四年 (一九七九) 『透明人間』 武富紀雄訳、潮出版社 潮文庫
- 平成三年 (一九九一) 『透明人間』 南山宏訳、岩崎書店 フォア文庫

平成四年 (一九九二) 『透明人間』 橋本楨矩訳、岩波書店 岩波文庫

平成十年 (一九九八) 『透明人間』 桑沢慧・福島正実訳、講談社 青い鳥文庫

平成十五年 (二〇〇三) 『透明人間』 雨沢泰訳、偕成社 偕成社文庫

平成十九年 (二〇〇七) 『透明人間』 段木ちひろ訳、ポプラ社 ポプラポケット文庫

と、すぐに十点以上に達する。さらに、幼年版世界の名作17『とうめい人間』(山本藤枝訳、金の星社、昭和四十四年)や児童名作シリーズ18『とうめい人間』(武田武彦編著、偕成社、昭和五十一年)など、児童向けに再構成したようなものも数多いし、『中学生の友2年』(小学館、昭和三十三年)付録『透明人間』(北川幸比古訳、中学生宇宙文庫)や『一時代』(旺文社、昭和四十年)付録『透明人間』(河合三郎文)、『5年の学習』(学習研究社、昭和四十四年)付録『透明人間』(加納一朗文、5年生文庫シリーズ9)のように、小中学生向け学年誌の付録としてダイジェスト版が少なからず作成されている。あるいは、手塚治虫編集劇画サスペンス『透明人間』(ウエルズ原作、シム飛香画、学習研究社、昭和四十九年)もある。並々ならぬ普及・浸透ぶりが推し量られるところであろう。

ところで、ここに挙げたものはいずれも、原題「*The Invisible Man*」に対して「透明人間(とうめい人間)」という訳語を当てているが、当初はそうではなかったらしい。大正二年(一九一三)に東亜堂書房から刊行された堀口熊二による翻訳本は、「科学小説 ？・之人」と題している。「透明人間」を「？・之人」とする。「訳者自序」の末尾に「尚この書の表題は初めに『見えない人』とする考でしたが、其後書肆の希望そのまゝ、『？・の人』と改めたものであります」とあって、もとは「見えない人」とする予定だったらしい。いずれにせよ「透明人間」ではない。本文中においても、例えば「何人でも動物の組織を——透明にすることが出来る！ 何人でも見えなくなることが出来る。色以外のものなら何でも出来る。自分は見えなくなることが出来るのである！」

One could make an animal — a tissue — transparent! One could make it invisible! All except the pigments. I could be Invisible!

(『The invisible man』初刊本)

そうだ動物を透明にできるかもしれない。色素を除いてすべての組織体を透明にできるだろう。だとすれば私自身を透明にすることだって可能なんだ!

(岩波文庫翻訳 一四八頁)

というように、「invisible」でなく「transparent」に対して「透明」という訳語が使われてはいるが、「透明人間」はどこにも見られない。そして、先に挙げた戦中戦後の翻訳が「透明人間」と和訳する箇所は、例えば

見えない人は立ち上^{あが}つて少^{ちひ}さい書^{しよ}斎^{さい}を歩^{ある}き出^だした。

(第十九章 一二二頁)

The Invisible Man rose and began pacing the little study.

(『The invisible man』初刊本)

透明人間は立ちあがつて小さい書斎のなかを歩き始めた。

(岩波文庫翻訳 一四八頁)

のように、「見えない人」と直訳し「インヴィジブルマン」とルビを付している。

また、昭和三年（一九二八）の横尾赤霧『透明の人間』（『キング』四一〇・一一、昭和三年十一月 ↓ 鮎川哲也編『透明人間大パーティー』（講談社文庫、昭和六十年）に収載）は、ウェルズ作品の翻案模倣作だが（上掲鮎川編書「解説」等参照）、タイトルを「透明の人間」とするし、本文中においても「透明人間」は全く使うことなく、

・「透明の人間だって」「そうです。僕は透明の人間なんです」

・透明の人は不意に走りよって、博士の手を取った。

・世間の人は透明体の人間の存在と云うことに就いては半信半疑らしい

などとしている。「透明人間」が、少なくとも熟語としてはまだ成立していなかったことを示唆していよう。その状況が違ってくるのは、本作の五、六年後のことであるらしい。

昭和八年（一九三三）、ウェルズ作品を原作とした映画がアメリカで制作され、翌昭和九年の三月十三日に大阪松竹座で封切られた。その際、『透明人間』の訳語が当てられたようである。当時の『キネマ旬報』第498号の「外国映画紹介」欄、『キネマ週報』第192号の「〈外国各社〉新封切映画紹介」欄に、映画『透明人間』が取り上げられ、前者第502号の「主要外国映画批評」欄では「興行価値 絶大。……封切館に於て三週連続映して終始大好評を収め」などと評されている。翌昭和十年（一九三五）の寺田寅彦『自由画稿』（岩波文庫『寺田寅彦随筆集』）十二「透明人間」は、最初に「映画『透明人間』というのが封切りされたときには題材が変わっているだけに相当な好奇の人氣を呼んだようである」と述べたうえで、訳語「透明人間」について、次の通り「疑問」を呈している。

この映画を見ているうちに自分にはいろいろの瑣末な疑問さまつがおこった。第一には、この「透明人間」という訳語が原名の「インヴィジブル・マン」（不可視人間）に相当していないではないかという疑いであつた。「透明」と「不可視」とは物理学的にだいたい意味がちがう。たとえば極上等のダイヤモンドや水晶はほとんど透明である。しかし決して不可視ではない。……「透明人間」という訳語が不適当なことだけは明白なようである。

『日本国語大辞典』第二版（小学館）は「透明人間」を立項し、「姿・形が目に見えず、声だけ聞こえるという、SFなどに登場する空想上の人物」として、映画封切から約半年前後、『新青年』昭和八年七月十二月号に連載された獅子文六『金色青春譜』（獅子文六全集上）秋琴抄の用例「その美しさと云つたら、クレオパトラを透明人間にしたって、小野の小町がアモール・スキンを使つたって、とても足許に及ぶもんじゃない」と、昭和三十九年（一九六四）の安部公房『他人の顔』の用例を挙げる。獅子文六の同作品にはもう一例、「チョイチョイ奥の間生活の細かいことまで外へ洩れるので、これは透明人間の仕業ではあるまいかと、彼女も不氣味に思いました」（「緑の地平線」と見られもする。昭和十二年（一九三七）には、名古屋汎太平洋平和博覧会が開催され、パビリオンの一つ「透明人間館」において「透

「透明人間模型」が展示された。翌年にはスピード漫画『透明人間』（中村惣次郎著作兼発行、中村書店）も刊行されたし、『古川ロッパ昭和日記』（晶文社、昭和六十二年）昭和十五年（一九四〇）四月十六日条に「包帯ですっかりくるんで、……透明人間の姿で」と記されていたりもする。先の榎尾『透明の人間』は、昭和十五、六年発行の『通信協会雑誌』三八六・三九一号に『透明人』と改題のうえ掲載されているが、意図的なのか否か「本稿は、昔僕が雑誌『キング』に連載した科学小説『透明人間』の構想を追ってこれを圧縮改稿したものである」と最初に注記している。昭和十六年（一九四一）には冒頭に掲げた通り、「透明人間」の訳語を冠したウエルズ作品の翻訳本が、ウエルズ科学小説叢書の一冊として初めて刊行された。そして、戦後になって昭和二十年代の半ばごろ以降、「透明人間」作品などが次々と出現してくる。昭和二十三年（一九四八）の『P. T. A. 世界少年』五―一には、小川哲男画の漫画『いたずらぶんちゃん』の「透明人間」が掲載された。翌年には特撮で知られた円谷英二の戦後復帰作である大映映画『透明人間現わる』（安達伸生監督）が上映され、昭和二十九年（一九五四）には東宝映画『透明人間』（小田基義監督）も生み出された。右大映映画が上映された昭和二十四年には、学習雑誌『小学六年』（二葉書店）において土岐雄三の小説『透明人間』の連載が始まるし、大阪の榎本書店がポケットマンガ『透明人間』（西岡英志著）とスクリーンマンガ『透明人間』（著者未詳）を刊行した（後者は翌年に、子供マンガ文庫『謎の透明人間』としても刊行）。同年刊行の『スーパーマン』（コミックス社）には「透明人間の『見えざる犯罪』」の章、翌昭和二十五年（一九五〇）の南洋一郎『緑の金字塔』（密林遠征の巻）（大日本雄弁会講談社）には「透明人間か？」の章があり、後者と同じ年の『玉川児童百科大辞典』3（玉川大出版部）には「人造人間と透明人間」という項目が立てられている。また、共に昭和二十六年（一九五一）に発表された、江戸川乱歩『透明怪人』（光文社文庫「江戸川乱歩全集」16）に「大友君は、いつのまにか、透明人間にされてしまったのです」、安部公房『壁』（阿部公房全集2）「バベルの塔の狸」に「ぼくは透明人間になったのだ!」と見える。

さらに、昭和二十九年（一九五四）一月の『小学六年生』（小学館）六一〇から三号に亘って、夢野凡天の漫画『透明人間』が連載されてもいる。海野十三は、「透明人間」という「非科学的な訳語を好まず」、昭和二十二―三年の『ふしぎ国探検』（海野十三全集12）ではドクター・ケンプに「透明というんではない。ほんとうは見えない人だ」と言わせており（同上全集2所載長山靖生「解題」、実際、映画封切の前年、昭和八年発表の『赤外線男』（同上全集2）には赤外線で見えない男が登場するものの「透明人間」という語は出てこない。しかし一方で、『ふしぎ国探検』とほぼ同時の昭和二十三年発表の『透明猫』（同上全集13）には「透明人間」を登場させているし、昭和二十七年には『透明人間』と題する作品を発表してもいる（山王書房、さくら文庫 上記全集未収録）。

以上のように、寺田寅彦の「疑問」にも拘わらず、映画封切以降に「透明人間」が、児童書を一つの軸としつつ、急速に流布し完全に定着していったのである。『朝日新聞』や『読売新聞』においても、昭和九年の映画封切以前には「透明人間」が見られないが、それ以後には散見される（朝日新聞クロスサーチ、ヨミダス歴史館）。また、冒頭に列挙した通り、ウェルズ作品の戦中戦後の翻訳などが「透明人間」というタイトルを変わず有することになる。「透明人間」という語は、映画化されたウェルズ作品の訳語として生み出されたものと捉えていいだろう。^①そして、その映画が封切られた昭和九年（一九三四）を、「透明人間」誕生の年とすることができよう。とすれば、本年、令和六年（二〇二四）は、「透明人間」誕生九十周年の、記念すべき年ということになる。

二 透明人間は「全裸が本来あるべき姿」

さて、三年前の本誌第二十号に収載の拙稿「不可逆性透明人間あらわる！——『今昔物語集』巻十六第32話——」（以下、「前稿」）では、「透明人間」以前の『今昔物語集』（新日本古典文学大系）巻十六第32話「隠形男、依六角堂観音助

「顕身語」を、「透明人間」以後の平成二十七年の奥田亜希子『透明人間は204号室の夢を見る』（集英社 ↓令和二年集英社文庫）と重ね合わせながら、前者における不可逆性透明人間というべきものを透明人間の文化史のなかに位置付けられないかと模索した。両者に登場する透明人間について、『今昔物語集』当該話のそれが現実世界におけるものであるのに対して、『透明人間は204号室の夢を見る』のそれが妄想の中のものであったり比喩上のものであったりするという根本的な違いがあるものの、通常の透明人間とは異なる、姿だけでなく声も透明になっていて他者に届かない点や、身体が見えないだけでなく実体を失っている点において、共通あるいは類似することに注目しておいたのだが、本稿では、右の根本的な違いとは別に存する、透明人間としての性格の違いに、まずは着目したい。

『透明人間は204号室の夢を見る』の主人公は、コミュニケーション能力が極めて乏しい孤独な二十三歳の実緒。一人の若い男が自分のデビュー作を大型書店で手にしたのを目撃して以降、掌編の小説を書いては男が住む某マンション204号室のポストに入れ続けるとともに、透明人間になって204号室を訪れるという妄想に耽るようになる。それとともに一方で、誰も見ていない自分は以前からずっと透明人間だったのだと悟り、自室では全裸で過ごしたりする。その全裸生活に入る際のこと、

上から順にバスタオルで身体を拭いていく。……最後に足の裏を拭い、全裸のまま洋間に戻った。着替えを出そうと衣装ケースに手をかけたとき、雷に打たれたように、意識がくっきりとした。私に服なんていらぬ。実緒は改めて腹のあたりを見下ろした。自分は透明人間だ。どうせ誰も自分を見ない。誰からも見えやしない。しかも季節は夏だ。防寒の必要もない。この身体を布で覆う意味は、きつとなに一つない。（文庫版 三九～四〇頁）

と記される。実線部は、例えば浦賀和宏『透明人間』（講談社、平成十五年）に「やっぱり私は、透明人間なのだ。誰にも、見えない。誰からも相手にされない」（七五頁、七八頁）と繰り返されるのと同様の、孤独な自らを透明人間に

比喩した表現としてありがちなものだが、それが波線部と併せて、全裸生活に入る理由として提示されているのである。ただ、その理由は、衣服を纏う必要性、意味がないから、結果的に全裸になるというものであって、全裸そのものに何らかの必要性、意味が求められているわけではないので、必ずしも根本的、積極的な理由とは言い難いところがある。しかし、全裸生活に入ってから暫くの様子が、

・裸で生活していれば、当然面倒なこともある。ゴミ出し程度の外出でも、いちいち着衣しなければならない。……手間のわりに服を着ている時間は短く、自分は一体なにをしているのだらうと虚しくなる瞬間もあった。しかし、これこそが本来あるべき姿なのだ。透明人間が服を着てどうするのか。

(文庫版 四一頁)

・バスタオルで全身を拭きながら、服を着ようか考えた。着たくない、というのが率直な思いだった。体調が優れないからこそ、肉を締めつけたり皮膚を塞いだりすることに気が進まなかった。また、若干の意地と矜持もあった。自分は透明人間で、全裸が本来あるべき姿だと思っていたはずだ。それを月経くらいで簡単に撤回していいものか。

(文庫版 七六―七七頁)

と描写されるところからは、単に衣服の必要性の問題だけでは済まない、全裸への強いこだわりが窺えよう。そもそも透明人間にとっては全裸が「本来あるべき姿」(二重傍線部)であって、自らを透明人間であると自認する実緒が、透明人間たるべく全裸になっているようである。全裸生活を送る、より根本的な理由が、そこにある。あるいは、全裸生活を重ねるに従って、そういう理由を実緒が見出していつている。実際に透明人間になるわけではないけれども、実緒の中で、あるいは作家の中で、イメージとして全裸が透明人間と強く結び付いていることは確かであるらしい。

一方、『今昔物語集』巻十六第32話では、まだ若い青侍の男が、大晦日の夜更けに一条戻橋で鬼たちに唾を吐きかけられて、透明人間状態になってしまう。帰宅した男を見ても、また男が話しかけても、あるいは男が近寄っても、妻子

が何の反応もしないので、「早ウ、鬼共ノ我ニ唾ヲ吐キ懸ツルニ依テ、我ガ身ノ隠レニケルニコソ有ケレ」と気付くのである。「身ノ隠レニケル」は、「所謂透明人間のように、身体が見えなくなったことをいう」（新日本古典文学大系・脚注）に違いない。その後、男は六角堂観音の夢告に従い、疫病神の類の眷属らしい牛飼童の言うままにして、もとの姿を取り戻す。この話のどこにも、男が全裸であるとか全裸になったとかいう記述は見当たらない。そういうことを窺わせるような記述もない。男は自分が透明人間状態になっていることを知らないで帰宅しているのであって、普段通りに外出時そのままの衣服を身に付けて妻子と対面したのに違いない。そして、もとの姿を取り戻す場面には

僧ハ不動ノ火界ノ呪ヲ読テ、病者ヲ加持スル時ニ、男ノ着物ニ火付ヌ。只焼ニ焼クレバ、男音ヲ挙テ叫ブ。然レバ、男真顯ニ成ヌ。

とあるので、その時点で着衣していたことは明白である。鬼に唾を吐きかけられた際の衣服と同じかどうかはともかく、それ以降姿を取り戻すまで、常に何らかの衣服を身に付けていたとしか考えられまい。本話を潤色・絵本化した『鬼ぞろぞろ』（舟崎克彦文、赤羽末吉絵、偕成社、昭和五十三年）も、終始着衣した姿に男を描く。

ここに、全裸を透明人間の本来あるべき姿とする「透明人間」以後の『透明人間』は204号室の夢を見る』に対して、透明人間なるものと全裸とが全く結び付いていない「透明人間」以前の『今昔物語集』巻十六第32話、という違いが、浮かび上がる。そして、その違いは、それら両者に限ってのものではなさそうである。

三 着衣透明人間から全裸透明人間へ

昭和二十三年（一九四八）の香山滋『白蛾』（岩谷書店刊『怪異馬霊教』収載 ↓前出鮎川編書 香山滋全集1）には「透明人間」という語は出てこないが、透明人間状態になった公爵夫人について、

彼は、姿なき姿をまさぐって、夫人の頬を両手ではさんだ。——はつきりと掌に感じられる夫人の頬、そして肩、胸、腰——夫人は何も着ていない、全裸である！

と記す。昭和五十一年（一九七六）の草野唯雄『透明願望』（『小説宝石』昭和五十一年十一月 ↓前出鮎川編書）も、不意に透明人間に出くわした際の状況を「その手が、不意に何かにつき当たった。温かくて弾力のあるものだった。私はギョツとして手をひっこめた。どう考えてもそれは人間の皮膚感であった」などと描いている。手に触った透明人間は、やはり全裸であったようだ。

平成二十九年（二〇一七）の阿津川辰海『透明人間は密室に潜む』（『ジャーロ』六二 ↓令和二年光文社刊同タイトル単行本に収載）は、透明人間病が蔓延し、その患者には衣服を着るなどして自らを非透明にすることが義務づけられている、という設定のSFミステリー。そもそもその設定自体が、透明人間は全裸であってこそ透明人間であるという理解に基づいている。そして実際、透明人間病に罹患しているある女性が、計略あつて透明人間になる場面に、

完全に透明になれば、体についた汚れはすべて、自分がそこにいることのシグナルになる。食後の歯磨き、歯間の掃除などは、かつてないほどの重要ごとになっていた。輪をかけて悩ましかったのは、爪の下に溜^たまる汚れである。……爪の下まで綺麗^{きれい}にして、裸のまま鏡の前に立ってみる。惚^ほれ惚^ほれするような透明ぶりだった。

とある。義務付けられている衣服はもちろん、歯間や爪の下の汚れまで取り除いた、完全な全裸になることによって、完全な透明人間になっている。あるいは、先出スクリーンマンガ『透明人間』（昭和二十四年）でも、「とうめいぐすり」を飲んだ悪漢が「きものをみんなぬいでしまえばおれはみえないぞ」と言つて全裸になる。また、『ドラえもん』『透明人間目ぐすり』（てんとう虫コミックス第8巻、小学館、昭五十年）では、とう明人間目ぐすりを差したのび太が、「服をぬいじゃえば、だれにも見つからずなんでもできる」「メガネをかけられないのがふじゅうだけど」と言っている。

全裸であつてこそ透明人間であるという意識は、実緒と同じくのび太にもあるらしい。

その他、福地泡介「透明人間現わる」(『小説club』三二・三、昭和五十四年)では、博士に透明人間になる薬を注射された助手が、衣服を脱いで街に出ているし、島田莊司『透明人間の納屋』(講談社、平成十五年)でも、透明人間は全裸であるという理解が重要な意味を持つている。同様の事例は数限りないほどであつて、先に挙げた浦賀『透明人間』では、小学生の少女が「透明人間はからだが見え透るから、ふくをぬげば、それだけで消えるのだ」と日記帳に書き付けている(冒頭「日記」部)。同じような理解は、現代人の間にもかなり拡がっていることだろう。

こうした近年の作品の透明人間と違って、古典作品に登場する透明人間の類には、先の『今昔物語集』巻十六第32話以外に目を向けても、全裸のものは見出し難いように思われる。

風来山人の宝暦十三年(一七六三)刊『風流志道軒伝』(日本古典文学大系)巻四では、浅之進が、仙術を込めた羽扇を背負うことによつて透明人間状態になり、清の乾隆帝の宮殿に忍び込むが、宰相の計略によつて姿が現れる場面に、容かたちはさらに見へざれども、散し置たる砂の上、足跡の付をめぐにして、忍居たる寓直ととのあの武士、彼火把たいちをなげかくれば、飛んとする間もあらむざんや、惣身に火付て燃上もれば、浅之進すべき様なく、急ぎ帯おびを引ほどきつ、裸はだかになりて飛出る内、羽扇も小袖も一時にみなく、灰とぞ成たりければ、丸裸はだかの浅之進が姿忽然こつぜんとあらはれて、始めて人目にかゝりければ、……

とある。「小袖」(二重傍線部)を身に付けていたようであり、火が付いたので帯をほどいて(実線部)裸になっている。また、柳亭種彦の文化九年(一八一二)刊『逢州執着譚』巻三では、星影土右衛門が隠形の術によつて透明人間状態になるものの、月光に照らされて影だけがくつきりと映し出されてしまうが、その場面の挿絵の描く影が明らかに衣服を身に付けている。いずれの場合も、着衣のまま透明人間状態になっていたのに違いない。

『今昔物語集』巻四第24話「竜樹、俗時、作隱形薬語」では、竜樹が二人の俗人とともに、「隱形ノ薬ヲ造」り「形ヲ隱シテ、人見ル事無シ」という状態になって、王宮に入り后達を犯すが、最後は足跡を手掛かりとする兵士たちによって竜樹以外は斬られる。着衣していることを窺わせる記述は特に見られないものの、全裸になったことを示す記述もない。前者のような記述は、着衣していれば、それが通常のこととして特に加えられることもないだろうが、後者の如き記述は、殊更全裸になっていたのなら加えられるべきところであろう。とすれば、竜樹らは、普段と変わらず着衣したまま透明人間状態になっているに違いあるまい。そう推測されるのは、『打聞集』第13話や『古本説話集』第63話に載る同話、『真言伝』巻一「竜猛」や『三国伝記』巻二第19話に載る、より原拠に近い形の同話、さらにはその原拠の「竜樹菩薩伝」所載話などにおいても、同じである。そして、万延元年（一八六〇）刊『三国七高僧伝図会』（国書刊行会刊影印）巻一は同話を記述するとともに、王宮に入った竜樹らが兵士たちに撃退される場面の挿絵（後掲図1）を掲げるが、透明人間状態になっている「竜樹」と三人の「隱形徒」は、明らかに衣服を身に付けた姿に描かれている。そのことは、時代の下るものとは言え、右の推測を視覚的に支持してもいるだろう。

その他、着衣していることを窺わせる記述は見られないものの、全裸になったことを示す記述もないという事例は、数多い。狂言『居杭』（日本古典文学大系）もその一例で、清水寺の観音から授かった頭巾の効力を知らないまま、居杭はそれを被り、亭主の反応を見て自分が透明人間状態になっていることに気付くのであって、その間に全裸になることを発想するわけもなく、当然、着衣したまま頭巾を被って透明人間状態になっているに違いない。無論、居杭が衣服を脱ぐ所作が舞台上で演じられることもない。『因縁抄』（古典文庫）第20話においても、鬼の死体から奪った蓑を、それが隠れ蓑だと知らずに男が身に付け、人の反応を見て隠れ蓑であると気付くのであって、やはり全裸になることを発想するわけもない。あるいは、『沙石集』（新編日本古典文学全集）巻九第20話「天狗、人に真言教へたる事」において、

何者かが大勢やって来るのを恐れて、真言師が「隱形の印を結びて、氣を鎮めて、居て見る」という行動に出ているが、仮に全裸になつてもいたのだとすれば、その旨の記述がこの記事の前後に加えられて然るべきところであろう。それが見えないのは、着衣したままだからに違いあるまい。真言師が結んだという「隱形の印」は「身を隠すために摩利支天を本尊として結ぶ印契」（新編日本古典文学全集・頭注）とされるが、実際、『仏說摩利支天經』や『兵法秘術一卷書』、南北朝期写という真福寺藏『隱形法』などに具体的あるいは詳細に説かれている、同印を結んで隱形する際の作法の中にも、衣服を脱いだり全裸になつたりするという所作は見当たらない。

右の如くにして古典作品における透明人間類の事例を見ていくに、すべて尽くせているわけでは無論なく管見の限りにおいてではあるけれども、全裸であることを窺わせるようなものは見出せないのである。着衣したまま衣服ごと透明人間状態になるのを「着衣透明人間」と称するならば、古典作品に登場するのはいずれも着衣透明人間であつたのが、戦後には全裸状態で透明人間となる「全裸透明人間」が出現してくる、ということになる。着衣透明人間から全裸透明人間へと、透明人間が衣服を脱ぎ捨て全裸になつたのである。

では、右のような変化をもたらした要因は何か。それは、冒頭に取り上げたウェルズ作品だと見られる。同作品では、科学者のグリフィンが、自ら開発した「血液の脱色剤」（岩波文庫翻刻 一五九頁）を服用するなどして、自身の身体を見えない存在に変える。無論、それは身体のみに作用するのであつて、衣服などが見えなくなるわけではない。そのことは、ウェルズ自身が「私の作品では、透明になることは魔法によつてではなく、視覚の科学を応用する結果であり、それは服や彼に降りかかるいかなるものにも及ばず。また、吸収される前の食べ物にも及ばない」と述べてもいる。⁽³⁾結果、

透明人間は突然椅子に座り、スリッパや靴下、ズボンを食卓の下に放り投げた。人々は啞然として見守っていたが、

彼は立ちあがって、今度は外套を脱ぎすてた。……（巡査）「みんな脱いでしまうと、たいへんなことになるぞ」

（岩波文庫翻訳 六六頁）

というような事態が描かれたりもする。身に付けているものを全て脱ぎ全裸になると、その存在が全く見えない完全な透明人間になり、「たいへんなことになる」のである。それは、先に見た戦後の全裸透明人間と同じである。ウエルズの透明人間の強力な影響下に、着衣していた透明人間が、戦後においてというよりも、先述の槇尾赤霧『透明の人間』のような一部の先行例を除いて、ウエルズ作品を原作とする映画が封切られて以降、つまりは「透明人間」以後に、衣服を脱いで全裸になったのに違いあるまい。

隠れ蓑であれ、摩利支天法であれ、仙術をこめた羽扇であれ、ウエルズの言う、「科学」以前の「魔法」に他なるまい。竜樹らの製造した「隠形ノ薬」も無論、ウエルズ作品の「血液の脱色剤」と同等の「科学」ではあり得ず、「魔法」に属するものだろう。ウエルズのSF作品が導入した「科学」が、着衣透明人間の衣服を脱がしたのだとも言えよう。実緒も、そうした「科学」的な裏付けのもとに、透明人間は「全裸が本来あるべき姿」と思っていることになる。

四 可視化する全裸透明人間

先に参照した『三国七高僧伝図会』所載の絵（後掲図1）は、隠れたり逃げ回ったりしている着衣透明人間を描いたものだが、見えるままにリアルに描かれているわけではない。竜樹ら着衣透明人間が他の人物と全く同じように描かれ、そのうえで、透明人間であることを示すべく、彼らの周囲に多くの「・」が加えられている。着衣透明人間が目の前にも何も見えなくて、その背後の風景がただ見えるだけである。見えるままリアルに描こうとすれば、その風景を描くしかない。しかし、それでは、透明人間の様子などを何ら伝えられず、それで、上のような決してリアルではない描

き方がなされることになるのだろう。目に見えないのが透明人間であるのだから、透明人間をリアルに見えるままに描こうとすること自体に無理があると言えよう。

しかし、元来の着衣透明人間が全裸透明人間へと変化すると、透明人間あるいは「不可視人間」（先引寺田寅彦『自由画稿』がリアルに描けるようになる。そのことを象徴的に示すのは、ウエルズ作品『*The invisible man*』の初刊本の表紙を飾る絵（後掲図2）である。描かれているのは、椅子とガウン、靴、グラスのみである。しかし、そこに透明人間の存在を確かに見ることができよう。ガウンを着て椅子に座り、グラスを傾けている透明人間である。これは、そのようにしている透明人間がいたとしたら、それを見えるままにリアルに描けている。すなわち、全裸透明人間は、衣服などを身に付けさせることによって、リアルに描き得るということである。あるいは、右の絵からは、寛いでゆったりとしている透明人間の内面、心情さえも、ある程度見て取ることができらるだろう。そうした点を意識しつつ描かれたと思われる、着衣の全裸透明人間の絵は、漫画やイラストなどに無数に見られる。

無論、絵画に描くような場合に限らない。全裸透明人間は、衣服などを身に付ければ、その身体自体が可視化するわけではないが、その存在が他者に視認されることになる。そういう意味で可視化されるのである。ウエルズ作品の先引箇所では、「透明人間は突然椅子に座り、スリッパや靴下、ズボンを食卓の下に放り投げた。……」とあり、巡査が「みんな脱いでしまうと、たいへんなことになるぞ」と叫んでいた。全裸になると視認できなくなつて「たいへんなことになる」ということであつて、逆に、「スリッパや靴下、ズボン」を身に付けた状態ならば、視認できるということに違いない。あるいは、「体についた汚れ」も「自分がそこにいることのシグナルになる」（『透明人間は密室に潜む』先引箇所）。透明人間からすれば、「服を着ようとすれば透明である意味はなくなつてしまう」（岩波文庫翻訳 一七六頁）のである。しかし、全裸透明人間は、ウエルズ作品のそれもそうだが、防寒のためや、他者から怪しまれないようにす

るために、衣服などを身に付けて、自ら可視化することも少なくない。

それに対して、着衣透明人間の場合は、衣服などを身に付けていても、それらごと見えなくなるのだから、当然、視認されることはない。『今昔物語集』巻十六第32話の主人公の男は、妻子にも自分の存在を全く認識してもらえないで悲嘆に暮れるが、それは、鬼に唾を吐きかけられた結果、男が着衣透明人間と言うべきものになってしまったからに違いない。もし全裸透明人間であれば、衣服などは見えるままであって、妻子らに視認されたことだろう。

江戸川乱歩『透明怪人』では、大友君が怪老人によって透明人間にされたと思い込まれるが、その際の状況が、

怪老人は大友君に、ねむりぐすりを注射して、イスにしばらくつけ、一坪ほどの、せまい部屋にとじこめた。その部屋には、一方の壁に三十センチ四方ほどの、小さい鏡が、はめこみになっていた。大友君が目をさますと、その鏡にじぶんの胸から上が、うつっていた。それはたしかに、じぶんの学生服だったが、ふしぎなことに、顔がない。顔のあるべき場所には、うしろのコンクリートの壁が、うつっているばかりだ。

両手をイスのうしろに、しばらくつけられているので、じぶんの顔に、さわってみることはできない。大友君は、しかたがないので、しばらくたまま、肩をうごかしてみた。すると、鏡の中の学生服も、おなじように、肩をうごかした。それで、鏡にうつっているのは、じぶんにちがいないことが、わかった。大友君はすっかり、きもをつぶして、とうとう、じぶんも透明人間にされたものと、思いこんでしまったのだ。

と記されている。そして、「しかけ」が、「壁にはめこんであるのは、透明なふつうのガラスで、そのおくに、はすに、ほんとうの鏡がおいであるのだ。そして、そのよこのほうに、大友君とおなじ学生服をきた人間が、胸から上だけうつるように、イスにかけ、顔はコンクリートの壁と同じ色の板で、かくしている。はすにおいた鏡にそれがうつると、大友君の目には、首のないじぶんのすがたが、うつっているように見えるのだ。大友君が肩を動かせば、むこうの人間も、

おなじように、肩をうごかす」と明かされている。

ここに出てくる「透明人間」は、身に付けている衣服は通常と同じく見える全裸透明人間であって、右のトリックは、そうした全裸透明人間であってこそ成り立ち得るものだろう。全裸透明人間は先述通り、着衣すれば、身体そのものは依然として見えないものの、その存在は視認できる、という状態になるのであって、大友君は、「鏡の中の学生服」を通して、「顔がない」透明人間の存在を視認し、さらに、肩を動かして、それが「じぶんにちがいない」と確信している。旧来の着衣透明人間であれば、「鏡」に映るのは専ら「うしろのコンクリートの壁」だけということになって、そこに、見えてはいないが透明人間が存在していて、それが自分であるとは、少年探偵団の副団長である大友君が信じ込むことはなかったであろう。ウエルズによって全裸透明人間が生み出され、それが日本においても映画や翻訳あるいは模倣作を通して普及・浸透していた。『透明怪人』自体にも、「有名な小説」としてウエルズ作品への言及が見られる。右は、そうした状況を基盤としてこそ可能なトリックだったということになる。

五 透明人間の自身不可視化

新興のウエルズ式的全裸透明人間と、旧来の着衣透明人間との間にはまた、以下のような違いが認められそうである。ウエルズ作品は、グリフィンが最初に透明人間になった際の状態を、

両手が曇りガラスのようになり、見ている間にますます透明になっていった。そしてついには手を透して乱雑に散らかった部屋を見ることもできた。眼を閉じていても目ぶたが透明なので否応なしに見えてしまうのである。手や脚が消え、次に骨や血管も消え、最後に小さな白い神経が消えた。

と描く。透明人間自身が、自らの身体が消えていく過程を目撃していて、ついには自らの身体が自分でも見えなくなっ

ている。「科学」的な方法で身体の色素を透明にするなどしたのだから、透明人間自身にも自らの身体が見えなくなるのは、当然のことであろう。寺田寅彦は先引部の少しあとに「……換言すれば『不可視人間』は自分自身が必然に完全な盲目でなければならぬ」とも述べており、そもそも透明人間になると目が見えなくなるのではということがしばしば言われるが、その問題は措くとして、である。

『透明人間は密室に潜む』も、先引部に続けて、完全な透明人間、全裸透明人間となった女性について、

シャワーの水が空中で跳ねる。湯船に浸^{ひた}かれれば、不定形の人形に水がくり抜かれ、わたしの体に合わせてその形が変化していく。ゾクゾクするような快感だった。

と記す。シャワーの水が空中で跳ねるように見えたり、不定形の人形に湯船の水がくり抜かれるように見えたりするのは、やはり、自分でも自らの身体が見えなくなっているからに違いない。安部公房『壁』『パベルの塔の狸』において、「奇妙な獣」に影を奪われて透明人間になった「ぼく」も、

シャツの袖をまくってみると、腕もすっかり透明でした。胸をはだけてみると、胸も透明でした。ズボンをまくってみると、脚も透明でした。顔は見えませんが、顔もきつと透明だったにちがいません。

と同様で、自らの身体が見えなくなっている。『透明人間は204号室の夢を見る』でも、想像の中でのことではあるが同様に、透明人間と化していく主人公の実緒について、

ベッドに横たわり目を閉じて、ゆっくり五つ深呼吸をすれば、身体はみるみるうちに透けていく。……今、私は透明人間だ。……^{また}瞼を開ける。目の前に手をかざす。爪も指も、きれいに透けている。

(文庫版 一三頁)

と描いており、透明人間の身体は他者だけでなく透明人間本人にも見えないものだと理解に基づいているのであろう。その他、「透明薬」を服用する前に上半身裸になった男について、「自分のからだが好きとおっていくのを、はつきり見

とどけたかったのだ」と説明する鮎川哲也『透明人間』（『中学一年コース』昭和三十五年十月号）『中学二年コース』昭和三十六年七月号 ↓ 『鮎川哲也探偵小説選Ⅱ』（論創社、令和元年）や、父親の激しい家庭内暴力のために「ここに居たくない」と願った少女が、ある日透明人間と化した際、自らの手を見て「透^すけてる」とつぶやく荻野純『透明人間の骨』（ヤングジャンプコミックス、集英社、平成二十九年）などでも、同じである。

しかし、旧来の着衣透明人間にあつては、これらの場合とは異なっているようである。

『今昔物語集』巻十六第32話の男は、帰宅し妻子の反応を確認して初めて、鬼に唾を吐きかけられた自らが透明人間状態になっていることに気付く。先述通り身に付けている衣服ごと妻子から見えなくなっているものと見られるが、その衣服も、あるいは掌なども、この男には通常と同じく見えているのだと推測されよう。そうでなければ、妻子の反応を確認するまでもなく、それよりも前に、自らの身体あるいは衣服の異変に気付くはずだと思われるからである。自分では異変に気付かず他者の反応によつて知るといふこともあるうが。

先に挙げたうち狂言『居杭』でも、清水寺の観音から授かった頭巾を被り、亭主の反応を見て自分が透明人間状態になっていることに気付くし、『因縁抄』第20話においても、鬼の死体から奪った蓑を身に付けた男が、人の反応を見てそれが隠れ蓑であると気付く。自身の身体が見えなくなっていることを、『壁』の「ぼく」のように自ら目視して確認しているわけではない。また、これらの場合も先述通り、衣服ごと見えなくなっているのであるが、自らが身に付けている衣服を目視し、それが見えなくなっていることを確認しているわけでもない。いずれの場合も、透明人間本人には、身体や衣服が通常通り見えているものと推量される。さらには、『沙石集』巻九第20話では、真言師が「隠形の印」を結んで、自ら意図して姿を隠そうとするが、天狗に「や、御房、御房」と呼び掛けられて「見ゆるにこそ」と気付くし、さらに、正しい印の結び方を天狗に教えられ、その通りにした際には、「ただ今は見え給はぬぞ」と天狗に指摘さ

れている。自身の身体や衣服が見えなくなっているのか否か、自ら確認するということが全くない。やはり、自らにはそれらが通常通りにしか見えないからに違いあるまい。

あるいは、狂言『隠笠』（大塚光信編『大蔵能狂言集』）。太郎冠者がすっぱに偽の隠れ笠を買わされる場面、「此笠をきたれハ、人の目にみえぬがてうほうじや」とすっぱに言われ、太郎冠者が「さらハそれがしがきて見う程に、ミてくれい」と言つて、隠れ笠を身に付けると、すっぱが「少も見えぬていにもてなし」、「こゑハするが見えぬ」と言うので、太郎冠者は満足して買う。また、太郎冠者が帰つて、主に笠を被せて「見えぬていにする」と、主は「よろこび」、今度は嫌がる太郎冠者に被せたところ、「ミゆるに依て、はらをたて、おい入にする」。隠れ笠を被った太郎冠者はすっぱに、主は太郎冠者に、それぞれ見てもらつて、その偽りの反応をそのまま信用している。隠れ笠を被った本人には、身体や衣服が何ら変わらず通常通り見えるのだという理解があつてこそ、成り立つ話に違いない。また、万治二年（一六五九）刊『百物語』（嘶本大系）第38話では、狐から与えられた偽の隠れ蓑を着て蔵に忍び込んだ法師が見付かつて殺されるが、隠れ蓑を着た本人にも身体などが見えなくなるのなら、偽物であることにすぐに気付いて、殺されずに済んだことだろうと思われる。上の狂言『隠笠』には「人の目にみえぬがてうほうじや」とあつたが、元禄六年（一六九三）刊『浮世栄花一代男』（決定版対訳西鶴全集）にも、「ありがたく此笠^{かさ}を被^かば、忽外^{たちまほか}よりは見えぬしあつて、是なん世の重宝^{てうほう}と嬉^{うれ}しく」と記されており、どちらの隠れ笠も、それを被ると「人の目に」^{ほか}「外よりは」見えないうこととで、逆に、被っている本人にはいつもと同じく自らが見える、ということになろうか。

これら以外、透明人間状態になっている人物にも自身が見えないと捉えられている事例は、管見の限り古典作品には見当たらない。先に挙げたような近現代の事例と違って、古典作品の着衣透明人間には、自らが通常通り見えているものと見られる。

ところで、「透明人間」以前においては、透明人間状態になることを「隠形」（あるいは「隠身」）と表現する場合が多い。それは、そういう状態になるのが、隠れ蓑や隠れ笠による場合でも、摩利支天法による場合でも、あるいは鬼の唾による場合でも、変わらない。例えば、ここまでの引用本文等の中にも散見するほか、「竜樹菩薩の隠形の法」（『宝物集』巻一、新日本古典文学大系）、「隠形ノ法ナド成就シタル人」（『愚管抄』巻三「醍醐」、日本古典文学大系）、「隠形鬼ハ其形ヲ隠シテ、俄敵ヲ拉」（『太平記』巻十六「日本朝敵事」、日本古典文学大系）、「摩利支天ノ秘法ヲ伝ヘ陰形術ヲ修シテ」（『三国伝記』巻六—6、三弥井書店刊「中世の文学」）、「おんぎやうの法を誦し、木のはのしたにかくるれど」（『舞の本』張良、笹野堅編『幸若舞曲集』）、「あはれおんきやうの法もかな」（『信長記』巻八「長しのかつせん」の事、古典文庫）、「隠形の呪を口の中にて唱へ居るを云ふなり」（『万川集海』巻十三「鶉隠れ」、国書刊行会刊翻刻）、「天狗に学得たる隠形の術」（『本朝醉菩提全伝』巻四・六・後談、山東京伝全集17）、「大約隠形に五法あり」（『南総里見八犬伝』第二十八回、新潮日本古典集成）、「隠形の術といへば、目の前で形が消たり現はれたりする様に思ふが」（加藤祐一『文明開化』初編下「術といふは手練といふに等しき道理」、明治文化全集）、「さらには『紅葉遺文』の「隠形術」、等々。「透明人間」でなく「隠形人間」であれば、寺田寅彦も文句の付けようがなかったろうか。現代中国語も、invisible man を「隠形人」と訳しているようだ。それはともかくとして、先学の所説を承けつつ前稿において「隠形」のための道具として最も馴染み深いものであったに違いないと述べた隠れ蓑による隠形の場合がまさにそうであるように、衣服ごと「形」を他者の視線から「隠」すのであって、「形」は元のままで、それ自体が変化して見えなくなるわけなので、「隠形」している本人には、自身が衣服も含めて通常通り見えるということに違いない。その点、透明人間と同様の意味合いを持つとされる、近世の豆男の類でも同様である。「形」のサイズが極端に小さくなって、他者の視線からは隠れるけれども、「形」自体が見えなくなるわけではないので、本人には自身の「形」が見えるはずである。

これらに對して、ウエルズ式の透明人間の場合は、「形」を単に「隠」すのではなく、「形」そのものを「科学」的方法で見えないものにするので、他者だけでなく、本人も含めて誰にもそれが見えない、ということになる。自分自身では見えていた透明人間が、ウエルズを経て、自身にも見えなくなった、つまり自身不可視化したのである。

六 内部が見える透明人間

寺田寅彦は先述通り、「透明」と「不可視」とは物理学的にかなり意味が異なっていて、「透明人間」という語は、「The invisible man」の訳語として不適当であると述べていたが、その語はまた、ウエルズ作品の原題と大きく異なるものを想起させ兼ねないとも思われる。「透明」について例えば、大槻文彦の『言海』が「スキトホルコト。（水晶、硝子、水ナド）」、『大言海』が「スキトホルコト。透キテ見ユルコト。（水晶、硝子、水ナド）」と記しており、「政治資金の透明性」と言えば、遮るものなどなく透き通っていて、資金の流れや使途が外からもありと見えることを意味するのだらう。「透明」には、「不可視」とは正反対の意味合いを含んだり、想起させたりする面がありそう⁽⁴⁾だ。とすれば、「透明人間」という語から、皮膚や皮下脂肪が透き通っていて、その内部を見ることのできる身体を持った人間、というようにものが想起されておかしくないように思われる。実際、『読売新聞』昭和十一年（一九三六）五月十七日朝刊の「乳児の亡骸で造るグロな透明人間」と題する記事に、「透明人間と申しますと、反対に、外側が透き通つてゐて、内臓がよく見えるやうにした人間であります」と見えたりする。

先に触れた通り、昭和十二年（一九三七）の三月十五日～五月三十一日、名古屋で汎太平洋平和博覧会が開催され、パビリオンの一つ「透明人間館」において「透明人間模型」なるものが展示された。「汎太博覧会エハガキ」「第五輯」と印字する袋に入れられたうちの一枚の絵葉書⁽⁵⁾（後掲図3）には、展示されていた透明人間模型の写真が、「透明人間

の正体」というキャプションとともに左上に見られる。翌年に刊行された立派な報告書『名古屋汎太平洋平和博覧会会誌』下巻によると、「透明人間館」は、名古屋医科大学や愛知県医師会の協賛のもとに設置された、「透明人間模型館」を正式名とする館であって、「有名ナル専門技師ガ現代ニ於ケル科学ノ粹ト精密ナル技巧トヲ集メ」、「透明不燃性ノセロニヲ以テ作ラレタル皮膚及ビ筋肉ヲ透シテ、吾人ノ嘗テ見ルコトヲ得ザリシ内臓諸器官、骨格、血管等複雑ナル人間ノ組織ヲ一目瞭然タラシメ」た「透明人間模型」を、ドイツのドレスデン市国立衛生博物館から購入して、「中心施設」として展示していたようである。その模型はまさに、身体内部が透けて見える人体模型に相違なく、確かに、そういう身体を持った人間として、「透明人間」が捉えられているに違いあるまい。先に挙げた新聞記事は、右の透明人間館設置に協賛した名古屋医科大学の解剖学教授長松英一によるものであって、乳児の亡骸から造った同様の「透明人間」を右博覧会に出品したいと述べてもいる。また、遡って昭和十年（一九三五）四月二十日の『読売新聞』朝刊の「生命の不思議」欄には、右の博覧会出品のドイツ製「透明人間模型」と同一物かと見られるものが、「文字通りの透明人間」として紹介されている。なお、博覧会の前年、昭和十一年六月二十二日に発行された『関西医界時報』第三二二号に「明年の名古屋汎太平洋博覧会に医家有志で『透明人間』特別出品」と題する記事が見えたりもする。博覧会閉幕後間もない昭和十二年七月発行の『文藝春秋』十五・七に載る宮田重雄「サーカス」には、「『透明人間』と云ふ言葉が人々の猟奇をそそつたらしく、透明人間館は大に繁昌したらしいが、僕の行つた時は、その館の壁の文字が消されて「模型」と云ふ文字が書き加へられてあつた。ポスターなどにも「模型」の二字を入れたことが歴然としてゐた。おそらく羊頭狗肉の非難でもあつて、慌てたものと見える」とある。

また、博覧会の翌年の昭和十三年に刊行された『明日の広告博覧会』(主催・日本電報通信社・発行)によると、同年一月十三日～二十二日に上野の松坂屋にて「明日の広告博覧会」(主催・日本電報通信社、後援・商工省)が開催

された際にも、右の「透明人間模型」が展示されたようである。同書は「この透明人間模型を見て感ずる人体組織の精密さより受くる暗示は、明日の宣伝広告に或る示唆を与へ得ないと誰か否定が出来るであらうか」などと展示意图を説明し、同書掲載の博覧会ポスターの写真には大きく「透明人間来る!!」と記されている。

ウエルズ作品の訳語として起用された「透明人間」であったが、同作品に登場する透明人間と全く異なるものが「透明人間」として、二つの博覧会を通して相当多くの人々によつて観覧されたようである。さらに、それらに先立って、『読売新聞』昭和十年（一九三五）四月十一日朝刊には、ペンシルバニア大学で製作された、内部が見える類似の人体模型が、「文字通りの透明人間」として紹介されている。

昭和十七年（一九四二）に日本船用品協会が発行した『船』第六九号には、土川義朗「透明人間の夢」という短文が載る。「自己紹介を兼ねた」、「船舶試験所大阪支所長」への「就任の御挨拶」ということである。その中に、

私は「何時、何処で、誰に、何の角度から見られても全貌を露して何の変化も無い」正直さを愛し、自ら之を透明なる精神と名付けて居る。併し之丈けでは有色透明であるに過ぎず、更に「何時、何処で、誰に、何の角度から見られても恥かしくない、」即ち無色透明の境地に漸近せんとするのが私の大それた理想である。……蠶は成熟して透明となり、科学小説又容易に透明人間なるものを創造したが、茲に私の云ふ透明人間はさう簡単には行かない。

同じことを為したのに対し甲には怒り乙には怒らざる不公平な上長者、……孰れも極めて不透明な人間として私は余り相手にしないことにして居る。……この透明人間の夢が果して何処迄実現されるかは将来の謎である。

と見える。ウエルズの「創造した」「透明人間」（波線部）とは別に、「私の云ふ」「透明人間」（実線部）が題名とともに出てくる。それは、「不可視人間」でも「隠形人間」でもないし、『透明人間は204号室の夢を見る』の実緒もそうだが、社会から疎外されたり社会的に存在感の薄かったりする人間に対する比喩としての「透明人間」とも異なる。外

面と内面に全く差がなく、外から内面が見通せるような、裏表のない「正直」な人間、というくらいの意味なのである。とすればそれは、先の「透明人間模型」の「透明人間」に近く、そちらが肉体的に透き通っていて内部が見える人間、こちらは精神的に透き通っていて内部が見える人間、ということになるのか。

これらの事例から窺える種類の透明人間というのは、以降、ほとんどあるいは全く受け継がれていないように思われる。「不可視」でも「隠形」でもない、通常の理解からは外れていて我々の目には誠に奇妙に映る、この内部が見える透明人間は、寺田寅彦が早くに疑問を呈した訳語「透明人間」が生み出したとも言えるべき存在であろう。同訳語のものとウエルズ作品の透明人間とは大きく異なっているが、右の通り同訳語誕生後しばらくの間にはかなり流布していたのであって、訳語として誕生した「透明人間」がおよそ共通の固定的な概念とともに広く人々に認知され普及するに至るまでの段階の一時期において現れるべくして現れた、透明人間であったのかもしれない。なお、『朝日新聞』昭和十年（一九三五）五月八日朝刊が、「透明人間」セロファン製の婦人テニス服」と題して、「セロファンを透して活躍する肉体のスポーツ美も満喫出来る」と記したりしているのも、内部が見える透明人間に近いだろうか。あるいは、『日本国語大辞典』が挙げる、先に引用した獅子文六の昭和九年の用例「その美しさと云ったら、クレオパトラを透明人間にしたつて、小野の小町がアモール・スキンを使つたつて、とても足許に及ぶもんじゃない」も、通常の透明人間としては解し難く、肌の極度の透明感などを意味していて、やはり内部が見える透明人間に類するものでもあるだろうか。

七 交雑・増殖する透明人間

前章までに述べたように、ウエルズ式の透明人間は、「形」そのものを「科学」的方法で不可視にした全裸透明人間であって、透明人間自身にも自らの身体が見えないが、衣服などを身に付けば視認される。それに対して、旧来の透

明人間は、「形」はそのままに衣服ごと他者の視線から隠して不可視にした着衣透明人間であって、透明人間自身には自らが通常通りに見える。両者の原理は大きく異なっている。それで、「透明人間」以前の後者について小稿では、「透明人間の類」「透明人間状態になる」などと表現してもきた。

しかし、原理は異なっている、結果としての現象は、基本的に両者共通している。先引通り、『日本国語大辞典』は「透明人間」を立項して、「姿・形が目に見えず、声だけ聞こえるという、SFなどに登場する空想上の人物」と説明していた。それは主として、ウェルズ作品やその模倣・影響作を念頭に置いたものかと臆測されるが、「姿・形が目に見えず、声だけ聞こえる」という現象はそのまま、旧来の透明人間にもあてはまる。先に挙げたうち、狂言『隠篋』に「こゑハするが見えぬ」、『愚管抄』卷三「醍醐」に「コエバカリニテヲコナヒ給テ、身ハ人ニミエ給ハザリケリ」とあるし、『風葉和歌集』（新注和歌文学叢書）所引散逸物語『隠れ蓑』逸文では、「かくれみの、左大将」が、「女のてをとらへて」いる「ほうし」に「仏のの給やうにてみ、にいひいれ」ており、やはり姿は見えず声だけが聞こえているに違いない。あるいは、同じく「透明人間」以前の芥川龍之介唯一の戯曲作品『青年と死と』（『新思潮』大正三年九月、芥川龍之介全集¹）は竜樹説話を踏まえており、具体的には『仏教各宗高僧実伝』（帝国文庫、博文館、明治二十九年）所収の『三国七高僧伝図会』が有力な典拠候補とされるが、同書に至るまでの同説話所載各書がいずれも、竜樹らが棄てた姿を隠したとするのを、上演上の問題を考慮してのことでもあるのか、「着ると姿の見えなくなるマントル」を使う形に変更していて、それを身に付けた竜樹らについて「声ばかりで姿は見えない」としている。

このように、隠れ蓑やそれに類するものを使用するなどした、旧来の透明人間も、同じく「姿・形が目に見えず、声だけ聞こえる」ことになるのであって、「透明人間」の範疇に含めて捉えられもすることだろう。実際、例えば、『ドラえもん』『未来世界の怪人』（てんとう虫コミックス第4巻、小学館、昭和四十九年）において、「じゃあ『かくれマント』

でもつかうか」とドラえもんに言われて、のび太が「透明人間になって、ぶんなぐるんだね」と答えている。また、岸武雄『透明人間になったおれ』（新日本出版社、昭和六十二年）でも、天狗からだまし取った隠れ蓑で「透明人間」になっている。「透明人間」以降においても、原理の差異を超えて、旧来の透明人間の類が「透明人間」として存続しているものである。

ウエルズ作品の影響は大きく、基本的にウエルズ式の透明人間の性質を忠実に引き継いでいる事例も多い。しかし、右のような状況のもと、そのウエルズ式の透明人間に旧来の透明人間の性質が交雑したような場合も少なからず見られる。例えば、右の『ドラえもん』『未来世界の怪人』において「かくれマント」を身に付けたのび太は衣服を身に付いている（後掲図4）のに対して、『ドラえもん』『とう明人間目ぐすり』では、先述通り、その目薬を差したのび太が全裸透明人間になっている。すなわち、後者の場合は確かに、服薬によって身体のみが見えなくなるウエルズ式の透明人間を引き継ぐものであるらしいのだが、しかし、それと違って、透明人間自身には自らの身体が通常通り見えると捉えられているようである。目薬をそれと知らずに差したパパが透明人間になって入浴しているのを見てママが驚くが、それに対してパパは「なにをおどろいてるの!？」と言っている（後掲図5）。パパには、自らの身体が通常通り見えているに違いない。「形」自体は変化しないで隠れるだけで、本人には普段と変わらず自身の姿が見える、旧来の透明人間の性質が、交雑しているのである。先に触れた昭和二十四年のスクリーンマンガ『透明人間』（榎本書房）でも、服薬した男が全裸透明人間になっているが、やはり本人には自らの身体が通常通り見えている。

『透明人間は204号室の夢を見る』では、先述通り、主人公の実緒が、透明人間にとって「全裸が本来あるべき姿」だと強く意識していて、実際に全裸生活を送ってもいた。また、想像の中で透明人間になる場面からは、透明人間自身にも自らの身体が見えないのだという理解が窺えもした。それらいずれも、ウエルズ式の透明人間の性質である。ある

いは、実緒が全裸生活に入る際、その理由の一つが先引通り「季節は夏だ。防寒の必要だつてない」と記されていたが、それも、ウエルズ作品の透明人間が防寒のために衣服などを盗むのを踏まえているのかもしれない。ウエルズの透明人間をかなり忠実に引き継いだもののように思えるところだが、一方でそうとは言えない部分が見られる点、注意される。実緒は何度か、想像の中で透明人間となつて、男のいる204号室に行くが、その場面を描いた中に、

・ 玄関のドアをすり抜ける実緒は、なにも着ていない。想像する側の実緒が服を着ていないと、透明人間の実緒も自然と裸になるらしかった。
(文庫版 四五頁)

・ 目を閉じ、身体を透けさせ玄関から外に出た。今日は裸ではないから、透明人間の実緒も着衣している。

(文庫版 一四二頁)

という記述が存する。実際に全裸生活を送るほどに、透明人間にとって全裸が本来あるべき姿だと強く意識していたはずの実緒が、想像の中で透明人間になる場合は、想像している現実の実緒に応じて全裸になつたり着衣していたりする。前稿に述べた通り、通常の透明人間と違って、先の『日本国語大辞典』の規定とも異なつて、声まで透明になつて他者に届かなかつたり、身体が見えないだけでなく実体を失っていたりするの、想像の中の透明人間であるからであつて、むしろそういう透明人間には相応しい性質だと捉えられる。しかし、右の点は、そのようなこととしては理解し難い。

想像の中の透明人間であるからこそ、実緒の実際の状態に関わらず、全裸が本来あるべき姿という実緒の有する強い意識を反映して、常に全裸であつて然るべきなのではと思える。その実緒の意識、あるいは作家の意識において、ウエルズ式の透明人間が大きな位置を占めつつも、そこに旧来の着衣透明人間のイメージが交雑しているのだろうか。

右のいくつかの事例は、基本的にウエルズ式の全裸透明人間の性質を引き継ぎながらも、旧来の着衣透明人間の性質が交雑しているというものであるが、そうした単純な形の交雑に止まらないで、「透明人間」以降、透明人間は、より

多様な性質を派生させながら増殖している。

全裸であるとか、自身にも自らが見えないというウェルズ式透明人間の性質は、「血液の脱色剤」などによって身体自体を見えないものに変えるという透明人間化の原理がもたらしたもののだが、それとは異なる原理が様々に考案された。先に挙げたうち、昭和二十七年の海野十三『透明人間』では、四次元世界を漂流しつつ三次元世界につかまっているため、三次元世界からは見えたり消えたりするという、「透明人間」が登場する。着衣したまま四次元世界を漂流していて、ウェルズ式の透明人間と違って衣服ごと見えなくなっている。他にも例えば、より早く昭和二十三年の香山滋『白蛾』に登場するのは保護色式の透明人間であり、加納一朗『半透明人間の逆襲』（ソノラマ文庫、朝日ソノラマ、昭和五十四年）の場合も、「人間に保護色をあたえる薬」を飲んで「一種の透明人間になる」（一九頁）。清水義範『半透明人間』（小説すばる）二〇〇一年一月号 ↓清水『博士の異常な発明』（集英社、平成十四年）では、「誰の脳も認識しない」「誰も気がつかない存在にしてしまいう体質に変える薬」を飲んで、「結果的には透明人間と同じ」になる。ドラえものの「石ころぼうし」と同種のものである。あるいは、天祢涼『透明人間の異常な愛情 ニュクス事件ファイル』（講談社タイガ、平成二十九年）では、保護色式の隠れ蓑と言うべきステルススーツを着て透明人間になる。これらでは、ウェルズ式の透明人間の場合とは異なる、それぞれの透明人間化の原理に応じた性質を、透明人間がそれぞれに帯びることになる。多様な透明人間が次々と生まれているのである。

あるいは、安部公房『壁』では影を剥ぎ取られて、中西やすひろ『Oh!透明人間』（月刊少年マガジン）連載、昭和五十七年～六十二年）ではイクラを食べて、阿津川辰海『透明人間は密室に潜む』では透明人間病に罹患して、各々透明人間になるのであって、右の諸作品が考案するような透明人間化の原理がほとんど存在していない。そういう場合も少なくない。社会的に存在感が稀薄で「透明人間」と比喩されるような人間が、『透明人間は204号室の夢を見る』

の実緒の如く自分は透明人間だと思い込んだりするだけでなく、それ故に実際の透明人間になるという設定のものも、猫田佐文『透明人間はキスをしない』（集英社オレシジ文庫、令和三年）など存する。さらには、例えば岩飛猫『透明男と人間女』そのうち夫婦になるふたり』（双葉社、令和三年）のように、先天的に透明人間であって、そもそも透明人間になる原理と全く無縁の場合もある。それらでは、原理に縛られることなく、透明人間の性質が自由に設定し得ることになる。例えば、「ここに居たくない」と願っていた少女がある日突然、透明人間になるのであって、やはり原理と無縁である、先に触れた荻野純『透明人間の骨』では、「透明人間って服は消えないんだと思ってた」のに服ごと消える、「着てる布団は消えない」が「持ち上げると消える」、「手に付いた絵の具は消える」、「壁をすり抜けたりは出来ない」、「水も私の身体に付いてるうちは消えるけど」、「離れた途端に現れる」、「透明になってる時の声は他人に聞こえない」などと、少女が最初に「いろいろ試して」「検証」している。そのような形で、作品の構想に応じて透明人間の性質が自在に選ばれているのである。

先には、昭和二十年代半ば前後においても、種々の小説や漫画、映画に次々と透明人間が取り上げられているのを見たり、前稿の冒頭部では、それらに止まらずさらには、紙芝居や演劇、テレビドラマ、楽曲などに透明人間が素材として盛り込まれているのを、平成期に限って概観しておいた。透明人間は、活動の場をも拡大させながら、右に粗々略記したような交雑と増殖を繰り返してきたのである。昭和九年（一九三四）は、単に「透明人間」という語が誕生した年というに止まらない、そうした透明人間の交雑・増殖現象の起点となったと言うべき年でもある。『源氏物語』以前のものかとされる散逸『隠れ蓑』など、日本においても早くから透明人間の類が生み出され、その後も、同作品におけるような隠れ蓑を着用するほか、摩利支天法を修したり、竜樹説話のように薬によったり、あるいは豆男になったりなど、様々なあり方で「隠形」するものが想像され続けてきたが、いずれもウェルズの言う「魔法」世界の存在であり、また、

自らの身体が自分では通常通り見える着衣透明人間である点においては基本的に変わることはなかった。ところが、そんな流れの中に、従来とは次元を異にした、「科学」に基づくウェルズ式の自己不可視の全裸透明人間が、動く映像を伴って、かつ、「透明人間」という複雑微妙なる名称を与えられて、投じられたことになる。当初の一時期には内部が見える透明人間という特異な存在をも派生させつつ、その衝撃による波紋が、その後九十年を経た今もなお広がっているかのようにあつて、その間に、新旧のものが交雑するなどしながら、また様々に性質を帯びながら、あるいは比喩に駆り出されたりもしながら、透明人間が増殖し続けている模様である。

注

- (1) 『海野十三全集』第二巻（三二書房、平3）の長山靖生「解題」が「透明人間」という名称は、H・G・ウェルズの『インヴィジブルマン』の訳語として定着したものだ^①、橋本順光「透明人間現る——隠れる物語から露わにする物語まで」（一柳廣孝・大道晴香『怪異と遊ぶ』青弓社、令4）が「日本語の『透明人間』という表現は、アメリカ映画『透明人間』（監督・ジェイムズ・ホエール、一九三三年）によって広まったようだ」と簡略に記す。本節は、これらが指摘する事情を今少し詳細に辿ったものということになる。
- (2) 吉田典代「摩利支天をめぐる言説と美術②男尊像」（『学習院大学研究年報』66、平31）や小峯和明「吉備大臣入唐絵巻とその周辺」（『立教大学日本文学』86、平13）参照。
- (3) 『The bookman』6（New York 1898）p178-179 日本語訳は、坂井妙子「H・G・ウェルズ『透明人間』におけるウエストエンドの服装描写」（『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』27、令3）所載のものによる。
- (4) 「透明人間」に関わる、こうした「透明」の語義の問題については、異孝之「透明という名の思想」（『異等著『ポスト・コンピュータの世界』朝日新聞社、平7）や、清水学『思想としての孤独（視線）のパラドクス』（『講談社選書メチエ、平11』）においても説かれている。大浦康介「透明人間の夢——SFと〈本当らしさ〉」（大浦編『フィクション論への誘い

——文学・歴史・遊び・人間（世界思想社、平25）もこの問題を取り上げ、「英語の“Transparent Man”から思い浮かべるのは、むしろ表面が透明で、血管や神経が透けて見えるような人体ではないだろうか」と説くが、まさにそうした意味で「透明人間」が実際に使用されていた事例を、以下に挙げることになる。

- (5) 絵葉書は複数種あったかと見られる。「模型透明人間絵葉書」「名古屋汎太平洋平和博覧会」「透明人間模型出品協賛会」あるいは「世界一」「超科学」「神秘」「定価金五銭」と書かれた袋に入れられたものが、稿者の手許に別に存する。透明人間館と透明人間模型の写真の二枚セット。なお、透明人間出品協賛会発行の「透明人間館招待券」も稿者の手許にある。「自昭和十二年五月一日 至昭和十二年五月三十一日」「通用一人一回限（大人、小人共通）」と見える。

- (6) 久保忠夫「芥川龍之介の『青年と死』の材源」（『東北学院大学論集』昭61）や小林幸夫「芥川龍之介『青年と死』典拠考」木下奎太郎『十一人の偏見』をめぐって」（『上智大学国文学科紀要』32、平27）参照。

- (7) 比喩としての透明人間については諸論少なくなく、注1橋本論文や注4清水著書参照。なお、『続千載和歌集』（新編国歌大観）に「世を捨てて人にも見えず知らねばわれこそ今はかくれみのなれ」（巻七雑体、七五五）という、嘉禄二年（一二三六）に出家して「真観」と称した葉室光俊の歌が見える。「人にも見えず知られ」もしなくなった自らを隠れ蓑に喩えているのは、例えば、島田雅彦『透明人間の夢』（『群像』平成二十五年二月号）において、戸籍と住民票を売った男が「オレはもう書類上はこの世に存在しない。願いが叶って、透明人間になったというわけだ」と伝言メモに記すのと、近いものがある。比喩としての透明人間とまさに同様の発想が、ずっと早く十三世紀には行われていたことにも注意されよう。

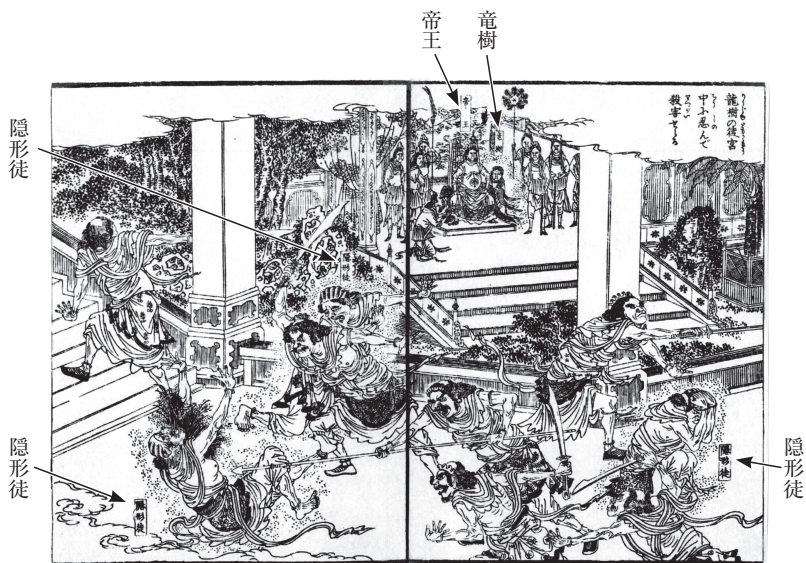


図1 『三国七高僧伝図会』巻一「竜樹菩薩伝」挿絵 万延元年（1860）刊
透明人間状態になっている竜樹と三人の「隠形徒」の周囲に加えられた多くの「・」が、
透明人間状態であることを示しているのだろう。いずれも着衣している。

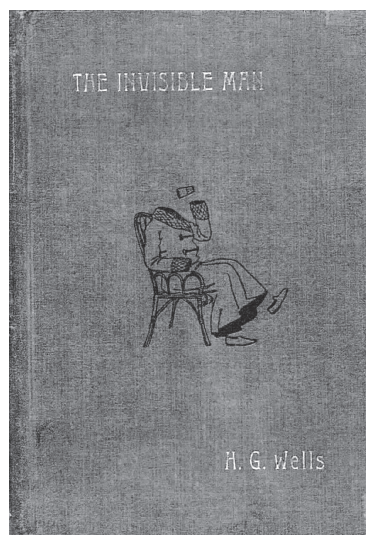


図2 H.G.Wells『The Invisible Man』初刊本表紙 1897年刊 本学図書館蔵本
着衣した全裸透明人間が、中央に描かれている。



図3 名古屋汎太平洋平和博覧会の絵葉書 昭和12年（1973）

図5 『ドラえもん』「とう明人間目ぐすり」（てんとう虫コミックス第8巻、小学館）昭和50年（1975）それと知らずに「とう明人間目ぐすり」を差して透明人間になり、入浴するパパ。パパには自らの身体が通常通り見えているらしく、ママの驚いている理由がわからない。

図4 『ドラえもん』「未来世界の怪人」（てんとう虫コミックス第4巻、小学館）昭和49年（1974）ジャイアンの「万能わな」に捕まってしまう、かくれマントを脱いだのび太は、確かに着衣している。